

# 女性たちのコミックス、 ガールズ・コミックス復活の試み

吉原ゆかり

マリファナと革命、ヒッピー・カルチャー、学生運動、ラブ&ピース、そして女性解放の時代であった70年代。しかし女性コミックスにとっては、決して楽な時代ではなかった。メインストリーム女性むけコミックスはほぼ絶滅、新しい時代の動きに寛容なはずのアングラ・コミックス界ですらも、フェミニズムを理解しようとはしない、「男性専用クラブ」的世界だった。

そのなかで、*It Ain't Me, Babe*に続き、1972年、ロビンス、ムーディアン、ルダールらを創立メンバーとして、女だけの手による *Wimmen's Comix* (『女性たちのコミックス』)が誕生した(1972-1992)。後に、ピンズワンガー、ラシャンらも参加することになる。女にとってひとつごとではすまない問題(美人願望、DV、キャリアなど)を積極的に取り上げ、後の女性コミックスに絶大の影響を与えることになる。女が、自分の経験と内面を露骨に描く自伝コミックスは、ぐちゃぐちゃな家庭、みじめだったこども時代、ダイエット、ボーイフレンドはろくでなし、DV、人工中絶問題など、女性にとって身につまされる切実な問題なのに、それまでおおっぴらに語られることのなかった問題を、コミックスの形で描くもので、以降の女性コミックスで重要なジャンルとなるが、女性による初の自伝的コミックス作品を掲載したのも、『女性たちのコミックス』である。

ただし波風も激しかった。無理解な連中がいたのはもちろんとして、女の解放をともに目指す仲間内からのつつこみもあった。ロビンスは、レズビアンを主人公とした初のコミックス、『サンディ、カムアウトする』(*Sandy Comes Out*)を発表する。この作品はレズビアンから、異性愛者の目から見たレズビアンを描いたものにすぎないじゃないかとつつこまれたが、この批判者が後に自らレズビアン自身がレズビアンを描くコミックスを創作することになる(メアリ・ウィングズ [Mary Wings])。また、女性による作品集を自称する割には、*Wimmen's Comix*という誌名にmen(男性)が含まれているのではないかという批判もあった(1992年に *Wimmin's Comix*に改名)。が、これらのエピソードは同誌のインパクトの強さと、志を同じくするものあいだの、実り多い対話を語るものだ。

ロビンスの「悲惨な関係」(『女性たちのコミックス』第14号表紙)では、涙目でこきつかわれている女性と、彼女をのろま呼ばわりして「早くビールを持ってこい!」と、ソファに踏ん反りかえり、彼女の女友達といちゃつくマッチョが描かれている。「最低男」と呼ぶのもったいないくらいの男であるが、彼女は自分ならば彼を変化させることができると信じているらしい。悲惨である。ロビンスが、先行誌 *It Ain't Me, Babe* に発表したBelinda Berkeleyを思わせる設定だ。ベリンダは大学は出たものの、つまらない仕事と家事で心身をすり減らしている。頭の古いダメ夫を養おうとしてのことだ。

このように、『女性たちのコミックス』は、それまでの男中心のコミック

スでは描かれることのなかった、女の女としての経験を描きだした。『女性たちのコミックス』は二十年の長きにわたり女性コミックス・アーティストに活躍の場を提供し、1992年に休刊した。その影響下、1980年代-90年代に、女性が編集し、大半の作品を女性が創作する作品集が数多く登場することになる。

『女性たちのコミックス』から派生してきたいくつかの動きを見よう。男性アーティストが勝手な想像で女の性を描くのに辟易していたロビンスは、女自身が自分のエロスを描く作品集『濡れた縶子——女のエロティック・ファンタジー』を刊行する(1976)。女が女のエロを描くことが十分にヤバかった。検閲に迫害され(ポルノ扱われた)、この作品集は一号だけで休刊したが、ロビンスは女性のためのコミックス、性の解放を目指して、さらに奮進する。シングル・マザーであったロビンスは、同じくシングル・マザーであるアーティストを集めて、1978年に、シングル・マザーが体験するさまざまな苦難をテーマとする、*Mama! Dramas*を刊行している。

だが1980年代にアメリカ社会は保守化した。女はキャリアを追及するのではなく、家にいて旦那の世話をやき、子を生み育てるべきだとするような風潮が復活したのだ。たとえば、シングル・マザーを国の福祉を食い物にする悪者扱いをする風潮が、共和党のレーガン大統領(1982-85)、父・ブッシュ大統領(1989-93)政権時代に広まった。

そのなかで、女・女格差も拡大した。白人と非白人、好条件で働くことのできる女性とそうではない女性との格差である。これはアメリカの強国主義とも関連している。このあたりの事情を実にうまく描いているのが、図版36、ルダール「今日は何を学んだの?」だ。白人女性カークパトリック(レーガン大統領政権時代、強硬な反共産主義政策を打ち出したことで知られる、女性外務大臣J.カークパトリックを想起させる名)は、昇進を祝って夫と外食を楽しもうとしているが、そのためにはベビー・シッターに時間外手当を支払って子の世話をみてもらわなくてはならない。ベビー・シッターの名前はローザ。「ムチャス・グラシアス(スペイン語、どうもありがとうございます)」と喋っていることからわかる通り、スペイン語を母語とする、中南米からの移民である。テレビでは、エルサルバドルでの惨劇を報道している。この時代、アメリカ合衆国はエルサルバドルの旧政権と結託して、共産主義新政権に対する武力強硬政策をとっていた。ひょっとしたらローザもエルサルバドル出身かもしれない。白人女性カークパトリックは、出世街道を歩むため、ローザをおそらくはかなり低い給与水準で雇用しているのだろう。女が女を搾取する。だがローザもまた子をもつ母、働く女性である。自分が仕事でいないあいだ、子を、アフリカ系アメリカ人だと思われる女性が経営するデイケア・センターに預け

ている。夫が国境を越えてアメリカに入学することができなかったためである。実質的にシングル・マザーであるローザは、デイケア・センターの女性に、子どもを迎えに来るのが遅れるようであれば、今後は世話を引き受けることはできないと警告されている。ロビンスを中心としてまきおこった女のためのコミックスのムーヴメントは、女にとって切羽詰まった問題に迫真すると同時に、女たちをとりまく社会や政治にも鋭い批判の矢を放っている。

1980年代なかばになると、少女むけのメインストリームのコミックスが姿を消して以来ほぼ10年という悲惨な状況が続いていた。ロビンスたちが推し進めてきた、女のための女によるコミックスという夢は、夢と消えたかと思えたが、悪いことばかりでもない。女の子の楽しみを求めるとする動きが登場してくる。1986年にロビンスは、大手コミックス会社であるマーヴル・コミックスをなんとか説得して、「ミスティとの出会い」(図版38)を刊行、つづいて「カリフォルニア・ガールズ」(図版39)をインデペンダント系出版社から刊行する。スレイト「エンジェル・ラブ」(図版40)も登場した。少女たちは熱く反応した。しかしこのどれもが、一年以内に出版を打ち切られた。1980年代、コミックスを買えるのはコミックス専門店のみだったが、そこは男の子だけの世界となっていて、少女には足を踏み入れたい感じがかった。そのなかで、「女はコミックスを読まない」という大ウソがまかり通ることになってしまっていた。

コミックス専門店には「バービー」もののコミックスですらも置こうとしなかった。2009年に生誕50周年を迎えたバービー人形であるが、白人金髪キュッと締まったウェスト(人間の身体に換算すると、約45センチ!)のバービーは、女はボディがよくて頭は数学なんてできないくらいの空っぽめの方がよいという、困りもののジェンダー・ステレオタイプを強めるものであるとか、ありえない美を理想化するもので、非白人の少女に自分

は美しくないのだと思わせかねないとか、拒食症の遠因になるとか、さまざま批判はできるのだけれど、称賛するにせよ反発するにせよ、バービーは少女カルチャーの重要な一部をなしていた。ところがコミックス業界は、そのバービーのコミックスですら打ち切りにした。図版44「バービー」は、バービーを心から愛するコミックス・アーティストたちが、バービー・コミックスの打ち切りの知らせに悲しむさまを描いている。

girlであること、少女であることを積極的に引き受けて、男性中心のコミックス界に対して戦うようなコミックス作品も生まれてきた。かつて、ロビンスは編集した *All Girl Thrills* (図版30参照) や、自作の *Girl Fight* で、「girl(少女)」という表現を使ったことで批判を受けた。「girl(少女)」という表現には、「女子供」扱いのニュアンスが強かったため、女の、ひとりの独立した人間としての権利を求めるフェミニスト的主張を行う者が、「girl(少女)」を自称するのは、なんだかちぐはぐだと思われていたためだ。だが、女自身が、自分を「女子供」扱いする社会に対して、「女子供ですけど、それがなにか?」と聞き直して自ら「girl(少女)」を自称するようになってきていた。「よい女の子は——天国にでも行けば? 悪い女の子——世にはばからせていただきます」というわけである。日本の少女マンガにおける「少女」のありかたには、女は成熟して異性愛の大人に成長していくべきであるとする社会の決めつけへの、密やかな抵抗の姿勢がこめられているのだが、日本の少女マンガにおける「少女」と、アメリカの「少女」コミックスとが、相互に影響を与え始めたのも、この時代の特徴だといえる。

このように、苦難続きの女性のためのコミックス、少女のためのコミックスであったが、ロビンスを代表とするひとびとは、決してめげることなく、新たな戦略を練り上げ、女性コミックスの新しい時代を切り拓いていくために邁進したのであった。

